

## 経験批判論の検討

エルンスト・マッハ<sup>(1)</sup>は二十世紀初頭まで活躍したオーストリーの物理学者・哲学者である。マッハの思想はアインシュタインの相対性原理の哲学的基礎になっているとか、あるいはウィトゲンシュタインの哲学に影響を与えたと言われているが、真実はこれからの課題のようである。しかし、たしかにいえることは、二十世紀初頭はヨーロッパにおいて、その文明・文化・政治体制が大きく動揺し、そのあり方が根本的に問われ、そのなかで伝統的な物理学、哲学も批判的になった、ということである。そうしたなかでマッハの哲学思想が作り出されたのである。そして、それ自体一方では大歓迎をうけつつも、周知のごとくレーニンによって批判されたりもした。このことによってマルクス主義ではエンゲルス流の哲学が正統派とされ、それが今日の停滞状況を招いているともいえる。他方、今日の現象学、論理実証主義の底流の形成にも関係しているといえる。

伊 藤 一 美

昭和五十九年十月一日受付

### 1 マッハの世界像

マッハは経験から出発する。その意味では経験論の立場にたっている。「私共が世界と呼んでいるものは、何はさておいても、もっぱら感官活動の所産である。」<sup>(1)</sup>もちろん、これは認識のはじまりにすぎない。学問はそこからつくり上げられていくのである。「学問はつねに日常的な経験から出立し、それを拡張し、或る相当広汎な領域で発見されたすべての事柄を集輯し、一般の使用に耐えるようにそれを論理的な全体へと統一する。」<sup>(2)</sup>。こういうと、経験論一般と同じようにみえるが、経験の概念内容がちがう。マッハの経験とは次のようなものである。それは個々なる感覚とか、孤立した個物の印象ではなく、全体像、物体も自分を動かしまわっている空間なのである。だからマッハはこういう。「私は、さまざまな物体にとりかこまれている自分を物体がそのなかで動く空間の内に見出す」<sup>(3)</sup>。だから、私が経験するのは四囲の世界なのである。

ところで、この環境世界は、私にどういう現われかたをしているのであろうか。マッハはいう。「四囲の物体が私に現われる仕方は環境世界のうちにある他の物体に依属する *abhängen*」<sup>(2)</sup>。一つの物体、あるいは一つの性質がそれ自体として孤立して私に現われるのではなく、諸物体、諸性質との関係のなかで現われてくるのだという。たとえば、ある対象が見えるのは発光性が在るからであり、しかもそれが通常の色に見えるのは日光のもとにおいてである。鐘の音が聞えてくるのは撞木によって鐘が揺り動かされるからであり、バラが匂うのは風が香気を運んでくるからである<sup>(4)</sup>。それだけではない。眼、耳、鼻の働きとも関係している。「鐘の音がどのように聞えるかは、鐘の形や揺れかたや、鐘と耳とのあいだの媒質や、さらにはまた耳そのものに懸っている。ほかの感覚についてもやはり同様である」<sup>(2)</sup>。私が感覚器官をもっているから、経験をもちうるのであるが、その経験は対象同志の、そしてそれと感官との依属関係において感覚されるのである。環境世界は、このような相互関係像の世界像なのである。これが経験の中味でもある。

こうした感覚的経験から学問が形成されていく。経験を批判的に吟味し、それを論理的な全体へと統一するのが学問である、とマッハはいう。「学問は、物体の色とそれを照らしている光の組成との依属関係や、物体の色と網膜の生理学的、病理学的性質との依属関係を明らかにする」<sup>(2)</sup>。つまり、マッハは二つの相互的依属関係を考える。一つは物体同志の依属関係であり、もう一つは物体と感覚器官との間でおこる

依属関係で、観察者の身体状況に依属する関係である。たとえば、「眼の向けかた次第では一つの物体が二重にみえたり、場合によっては三重にみえたりする。ぐるぐる廻ったあとで物体をみると、動いている物体が止まっているように見え、止まっている物体が動いているようにみえる」<sup>(5)</sup>といったようなことである。こうすると、依属関係といっても、外部における依属関係と、身体、つまり観察者側に依属する依属関係ということになる。マッハは前者を物理的依属関係といい、後者を精神生理学的依属関係、あるいは心理学的生理学的依属関係という<sup>(6)</sup>。

物理的依属関係についてみてみよう。マッハはいう。「例えばくるみといったとき、まとまりをもった或る複合体の全体が現前する」<sup>(7)</sup>。小さな緑色の球・駱駝色の殻、そして実。こうした印象の複合体の全体が「くるみ」である。こうしたことがらの相互的な依属関係が「くるみ」なのである。これらの一つ一つの個別的な知覚をもっては「くるみ」の全体を表わすことは出来ない。「くるみ」といったときわれわれはその全体像を思い浮かべるのである。そのなかで個別的な知覚・緑色・丸い形とかが生きているのである。個別的な知覚が現象であれば「くるみ」は現象複合体なのである。また、マッハはこうもいう。「燃すと激しいむせるようなガス(亜硫酸ガス)を発生し、水銀とまぜると赤い物質(辰砂)を生ずる淡黄色の物質を、私共は硫黄と名づけ、個々の現象を現象複合体の全体と密接に関連づける」<sup>(8)</sup>。つまり、硫黄は、ガスを発生し、辰砂を生ずる等々という現象の複合体なのである。物体とは現

象複合体なのである。同時に、個々の個別的現象のいくつかが関連づけられており、そのかぎりで知的な作用が加えられており、物体は「知的な形象」であり、「学問的な概念」である、とマッハはいう。しかし、現象複合体なのだから、現象を否定するものではない。現象自体は個別孤立したものであるが、しかし「知的な形象と合致し、それが喚びおこす期待を実地に充たす……感性的な形象である」<sup>(8)</sup>。外的世界は、こうした感性的な形象の相互依属的複合体的全体なのである。

では心理学的依属関係とはどういうことか。例えば、白紙は日光、正常な眼のもとで白くみえる。しかし、眼をとじれば見えなくなる。サントニンを服用すれば網膜はその薬理作用で黄色になる。そのため白紙は日光のもとでも黄色に見える。また、記憶や感情によっても見えかたがことなる。つまり、この依属関係は観察者の生理的・精神的状態に依属する依属関係であり、観察者の状態によって外的世界の現われ方が異なるということである。

このように、物体・環境世界、現実世界は二つの依属関係からなる世界である。

しかし、伝統的には物体を実体としたり、また物自体 Ding an sich という考え方もある。また自我や精神を実体とする考えもある。これらをマッハはどう批判しているのだろうか。マッハは物自体について次のようにいう。世界は諸現象が多岐多様な仕方で結合したものであり、それにさまざまな心理的なものが結びついてできている。これは

一つの綾織物である。そのかぎり物体は絶対的に恒常的なものではない。しかし、例えば私の机がここにある。それは明るいときもあれば、暗いときもあり、暖い時もあれば、冷い時もある。またシミがついたりもするし、折れた脚を修繕したりもする。それにもかかわらず、その机は私の机であり、この点では変化しない。このように変化のなかにあつて変化しないものがある。これが物自体となるのだ、とマッハはいう。しかも、人間は他の動物と比べて意識的に観点を設定する能力にすぐれている。目を惹きやすい細目を無視することも出来れば、些細な点を顧慮することもできる。普遍的な抽象に上昇することも出来れば、極めて個別的なことに沈降することもできる。このため、例えば見ることに、聞くことに、嗅ぐことに、触れることなど全く互角のものなだけで触れることに固執したりする。というのは、色・音・香りは無常で、触れるものは持続的であり、容易には消失しない核とみなされるようになる。そして、この核が無常なものの担い手であるようになってしまう。また、人間の抽象的思考力によって「力学的物理学が特異な大発展をとげた結果、空間的時間的なものに色や音や香りに比べて或る高次の実在性が帰せられる」<sup>(9)</sup>にいたった。ニュートンの空間時間概念の成立である。「従つて、色、音、香りそのものよりも、これらのものの時間的・空間的紐帯の方が一層実在的であるかのように思うようになった」<sup>(9)</sup>。さらに、こうした恒常的なものが成立すると、逆に「複合体の諸構成成分がその属性として現われてくる」<sup>(10)</sup>。甘い、暖い、冷い、固

い、色といったものがその物体にとつての属性とみなされるにいたる。この結果、さらにこれらの構成成分を一つ一つはぎ取っても、最後にそれら諸属性、諸性質が附着していたものが残るといふように考えるにいたる。それは目立つた変化をしないもので、漠然とした像である、それ自体で存在するもののように見える。これが物自体である。「任意の構成成分を一つずつ取り去ってもこの像は依然として全体性を表わし、再認識されつづけるので、構成成分を全部除去ことができる。そうしてもなお或るものが残るといった臆見を生ずることになる。……こうして物自体の哲学思想が成立する<sup>(11)</sup>」。

マッハによれば、こうした考えは全く誤りである。触れることは、見ること、聞くこと、嗅ぐことと全く互角のものである。空間や時間も高次の実在性をもつものではなく、色や音と同様感覚と呼ばれるものであることが感官生理学から明らかになっている。<sup>(12)</sup>「私の机というものも、変化したものにくらべて変化しなかったものの方が多かったにすぎず、そのため絶対恒常的なものがあるように思われたにすぎない、とマッハはいふ。こうして、物自体の思想は一つの誤謬、臆見だということになる。物体は現象複合体であり、一つの依属関係なのである。

私の友人がいる。衣裳が変わるし、大真面目になったり、あるときは人が変わったように陽気になったりもし、変化する。記憶も薄らいだり、間違ったりもする。だが私の友人であり、変化にくらべれば恒常的なものの総和が大である。このことから、いろいろな変化しても変

化しない恒常的なものがあり、これが友人を友人として思うに至る。そして、この恒常的なものに比較的变化しやすい諸性質が附着している、というようにみなされるにいたる。こうして、本性と属性という考えが成立し、その本性が自我概念となってきたのだ、とマッハはいふ。しかし、これも物自体と同様誤った思考である。自我も諸性質の複合体である。そのなかに相対的に変化しやすいものと、そうでないものがあるだけである。

マッハのこうした物体観・自我観から、当然にも次のようなことがいわれてくる。それは、実体主義と主体主義の批判である。

鉛筆は空中で見ると真直ぐに見える。ところが、この鉛筆を斜めに水中にさし込むと曲って見える。人々は、通常後者は間違いだといひ、それを光の屈折で説明する。しかし、マッハは「これら二つの場合、いづれも事実が現前しているのだ<sup>(13)</sup>」という。つまり、マッハによれば「これら二つの事実<sup>(13)</sup>は、まさしく条件の異つた別様の要素連関を表わしている」にすぎない。「水中にさし込んだ鉛筆は、その周囲の事情によって視覚的には曲っている<sup>(13)</sup>」にすぎない。が、「触覚的、ならびに計測的には真直ぐなのだ<sup>(13)</sup>」。物体がわれわれに現前する相において把握・理解しなければならぬ。というのも、実体はないのだから。しかし、にもかかわらず実体主義は不変なもの、不変という基準をつくって世界を理解しようとする。実体から世界を理解せよという。こうして、「世界は——その一部分としてわれわれがあるのに——われわれからまっ

たくひき離されてしまい、無限のあなたに押しやられてしまったのである<sup>(13)</sup>」。

主体主義は実体主義の他方極である。これは、われわれが世界を無限のあなたに押しやることである。たとえば、尖端Sをもった物体がある。Sに触れると刺痛を感じる。このようなことにくりかえし出会っていると、人々は物体とは刺痛、つまり感覚であると思うようになる。「この種の事態に頻々と出会っているうちに、人々はついに物体のあらゆる性質を、持続的な核から出て身体を介して自我にもたらされた「結果」——この結果が感覚と呼ばれているのであるが——だと見做すようになる<sup>(14)</sup>」。つまり、「世界はわれわれの感覚だけからなりたっている」と考えるようになる<sup>(14)</sup>。これが主体主義である。しかし、この考え方は、実体主義同様、物体と身体、感官との相互依属関係、交互作用を正しくみていないのである。

このようにみてくると、マッハの考えでは、現実世界は、物体・身体・自我つまり精神の相互依属関係から出来上がっており、しかもこれら三者が、それら自体としても内的な依属関係から出来上がっていることになる。では、これら三者が、どのようなものの相互依属関係なのか。

現象複合体は、複合体であるから分割することが出来る。いま、物理的複合体、物体をみれば、いろいろな色、いろいろな形、いろいろな音、いろいろな固さなどがある。しかし、これらを抽象してみると、

色・形・音・圧等々となり、さらに形は空間へと抽象出来る。また、現象は時間としても現われる。こうして、「この分析をぎりぎりまでおしすすめると差当りもうそれ以上分割できない感性的知覚の要素に到達する<sup>(15)</sup>」。これをマッハは感覚要素とか、世界要素とか、単に要素という。この要素の複合体として現実世界があるのだ、という。

では、この感覚要素にはどのようなものがあるのか。物理的な外的世界は、色、音、圧、空間、さらに時間等々といった要素からなる。これをマッハはA, B, C……と記号化する。われわれの身体という複合体も感官そのもの、筋肉、脳とかいう等々のものからつくられている。これをK, L, M, ……と記号化する。さらに、記憶、気分、感情の複合体を自我という。これらの要素を $\alpha, \beta, \gamma, \dots$ で表わす。だが、これらの要素はそれ自体存在するのではない。色、音そのものがあるのではない。白、赤……等々として具体的にしかありえないのである。こうした諸要素の重層的相互依属関係、マッハはそれを函数関係ともいうのだが、これが現実世界である。

第一に、これら要素はグループ自体で函数関係にある。例えば、白い球が鐘にあたる。そこで、音がする。強くあたれば強い音がする。この白い球は日光の下で白いのであり、ナトリウムランプの下では黄色く、リチウムランプの下では赤い。これは、A, B, C, ……の相互関連の例であり、物理学的世界のことである。これをマッハはF(A, B, C, …)で表わす。同じことが身体や精神の諸要素にもいえることは自

明である。

やらに、 $A, B, C, \dots, K, L, M, \dots, \alpha, \beta, \gamma, \dots$ とて要素グループが相互に規定し合い函数関係をもっている。まず、 $A, B, C, \dots, K, L, M, \dots$ とである。さきの白い球に再度登場してもらう。それは、日光の下で、しかも通常の視感覚で白い。いま、私がサントニンを服用する。球は黄色に見える。また、一方の眼を指で側方に押しやると二つの球が見える。眼を閉じると球は現前しない。聴神経を切断すると音がしない。<sup>(16)</sup>このように、要素 $A, B, C$ は要素 $K, L, M, \dots$ と相互に関連しあっているのである。<sup>(16)</sup>そこで、 $A, B, C, \dots$ 相互の連関を、つまり色と光源、あるいは他の色、温度、空間、時間等々の依属関係、これが物理学の対象であるが、それに限って研究しようとするのが物理学であり、これに対して、色と網膜( $K, L, M, \dots$ )との依属関係、これが心理学の研究対象であり、それを研究しようとするのが心理(生理)学である。したがって、物理学と心理学とは研究素材は同じで、ただその研究方向が異なるだけだとなる。もちろん、両者の間には溝渠などはないことになる。

次に、 $A, B, C, \dots, \alpha, \beta, \gamma, \dots$ とである。両要素グループの相異は、「緑の樹を眼前に見ている場合」と「緑の樹を想起、または表象している場合」<sup>(17)</sup>のちがいである。眼前に見ている場合と比べて「表象された樹は、確定の度かはるかに低く、形姿かはるかに変りやすい。表象された樹の緑は、はるかに淡く移ろいやすい」<sup>(17)</sup>。しかし、前者は後者

との依属関係において前者である。つまり、色や音や空間や時間は、記憶や感情や気分と強い依属関係のもとで感覚される。逆のこともいえる。だから、両要素グループは函数関係をもっているのである。しかも、表象・記憶・感情・気分は、それ自体としてあるのではない。具体的にありうるのである。特に記憶は、緑とか赤とかの記憶としてあるし、感情、気分はたのしい黄色とか、快よい音としてある。こうしてマッハは、「 $A, B, C, \dots, \alpha, \beta, \gamma, \dots$ における根本的成分(色、音、空間、時間、運動、感覚等々)は同じである」<sup>(17)</sup>、という。だから、 $\alpha, \beta, \gamma, \dots$ は $A, B, C, \dots$ の表象であり、ただ $A$ と $\alpha$ とが、それぞれ別の諸要素と結びついているにはかならない、という。それが、眼前に見ていることと、想起、表象との相異だという。この点からも、物理学と心理学との根本的同一性を、マッハは語る。

最後に、 $K, L, M, \dots, \alpha, \beta, \gamma, \dots$ とである。身体の緊張や弛緩、あるいは調子が気分、感情、記憶、表象という精神に大きく影響を与えうるし、又逆もある。

以上、みてきたように三つの要素グループは相互に函数関係にある。それだけではない。例えば、環境が身体に著しい変化を惹き起こし、それによって精神にも変化を惹き起こし、逆に活潑な表象が行動となって発露し、環境についての感じ方を変えもする。このように三要素グループは、三者一体となった函数関係にある。 $F(A, B, C, \dots, K, L, M, \dots, \alpha, \beta, \gamma, \dots) = 0$ である。これが、マッハの世界像である。

## 2 マッハの認識論

マッハの認識論は模写説である。しかし、機械的唯物論などのそれとはちがう。それは要素函数関係の世界像からしても当然である。感覚要素のなかに *s, p, n, ...* という精神を構成するグループがあったが、これが認識主体である。したがって、マッハの考えでは認識主体とは現実世界を構成しているものであり、現実世界の彼岸に存在しているのではなく、現実世界の中にあるものである。単純に、対象と主体という図式ではない。認識主体は、自己を含めた対象を把握する。

模写説といえ、外界をキャンバスになぞる、というように聞えるが、マッハのそれはちがう。活動といった意味をもち、生物がなす適応活動の一つだとみる。「生物は一部先天的(恒常的)、一部後天的(一時的)な適応によって周囲の状況と平衡を保っている」<sup>(1)</sup> たとえば、適応といえは蛙が飛んでいる昆虫に飛びついて餌をとるとか、蝶や蛾が生命を維持するため、色のついたものや光に向かって飛んでいくことである。しかし、逆にこのことが命とりにもなる。蛙は知らずに揺れ動く布切れに飛びつき、釣針にかかるし、蝶や蛾は壁紙の花模様にとまったり、火に飛びこんだりする。これは適応だが、しかし認識活動ではない。本能的適応である。これには、感覚・表象・意志といったものが介在していない。だから、たやすく生命をおとすことになる。こ

れに對して、意志が介在した適応もある。この後天的適応が認識活動にあたる。

では、適応はいかにして成立するのか。蝶が花や光、花の絵や火に向かう。色をみると花だと判断するからにちがいない。色と花とが連合されているからであらう。マッハはいう。「かねがねよく知っている物体の視覚形像が網膜に映ると、それと連合して触覚印象をはじめ、その他の性質の表象も泛んでくる」<sup>(2)</sup> からにちがいない、と。我々でも、暗闇で或る物体に触れると視覚形像が泛かぶ。このように、適応とは表象と表象、知覚觀念と知覚觀念との連合なのである。したがって、後天的適応とは、意志をもってこの連合を誤らないようにしていくことである。蝶の例でいえば、生花と絵を連合させないようにしていくことである。連合を事実にして具体化し、緻密化していくことである。意志をもっていればそれが出来るのであり、そうしたことが認識活動なのである。それは、意図的な適応ともいえる。認識活動とは、表象の過程が体験に出来るだけ精密に適応するということである。かくして、模写といっても体験を正しく把握するとか、吟味するとか、ということである。こうすることで、觀念・表象の正しい連合が可能となるのである。こうもいえる。物体がどういふ感覚要素の複合体であるかをつかむことである。くるみの例でいえば、緑色、あるいは丸いものを見て、くるみだというのではなく、緑色、丸、ラクダ色をした固い殻、おいしい実という要素、つまり觀念、表象全体でくるみと



するようになることである。綠色、丸い形等々を連合させることである。

では、この連合とはなにか。観念と観念、表象と表象との連合とは判断のことである。判断とは  $S+P$  である。二つの観念を結合することである。例えば、毒茸を食用茸とまちがえたことのある人がベニテングダケの赤白の斑点を毒性のしるしと考える。赤白の斑点と毒性とを結合する。しかし、これは直接的な体験にもとづく判断にすぎない。このような五官による直接的な簡単な観察や、直観や体験にもとづく判断を「直証的」判断と、マッハはいう。「水は流れる」、「塩は水に溶ける」も、これに属する。これに対して、概念的判断というものがある。それは概念の登場をもつて成立しうる。概念は、マッハによれば、経験（体験）をつんでいくと、それらの経験を集約する<sup>(15)</sup>という精神活動が起こるが、これによってつくり出されたものである。精神活動によって、感性的徴標が重要性や格付けに則って揃分けられるが、このことによって成立する。だから、概念は感性的要素からのみつくり出されていくもので、模写である。たとえば、力は一つの概念である。初め、圧す力、牽く力という感覚要素が知覚されていたが、それをまとめて力という概念が成立し、やがて電力、磁力、重力をも含めた力一般という概念となった、とマッハはいう。<sup>(4)</sup> 酵素、温度、熱量、電流、磁気なども概念である。酵素や温度は「木は空気の中で燃える」という感性的経験を集約することで行き出された。したがって、マッハの概

念は、経験の背後を読むとか、現象の背後をみるといったことからつくり出されたものではない。単なる「経験的概念」である。<sup>(9)</sup> このような概念の連合による判断が概念的判断である。それは「木は空気の中で燃える」というようなものでは当然なく、燃焼は燃料と酸素と温度との連合によって生ずる、というようなものである。酸素と聞けば燃焼のイメージがわくが、そのようなものが概念である、という。酸素で連合判断がおのずから生じてくるのである。しかし、これは、模写である。学問や自然科学はこういったものである、とマッハはいう。「事実の概念的総括をまづはじめて簡約的な自然科学が可能になる。概念的総括という手段がなければ、自然科学は際限のない不得要領な、殆んど使いものにならないような個別的諸事の枚挙になりうることであろう」。もちろんこの事実とは経験的事実で、「物的ないし心的な見出されるがままの事実」であり、概念的総括といっても「感性的事実を見通しよく秩序づけて包括するにすぎない」。この意味では、表象や概念を整理・複合することが認識である、といえよう。結局、成素とその複合体という近代悟性主義である。

またマッハは、近代科学の実験という研究方法を肯定する。現物実験は当然にも、思考実験こそが、科学の基礎である、という。「思考によって導かれる実験こそが、科学の基礎となり、経験を意識的意図的に拡張する」。<sup>(7)</sup> 思考実験といっても学者、科学者のなすそれは、事実の表象にもとづいてなされる。つまり、学者は事実を表象のかたちで模



写している。事実はいくつかの感覚要素から出来ている。表象はそれを模写している。このとき、ガリレイの落体の実験のように「……量的な影響をもつ要因を……その一つないしは幾つかを思考のなかで減量していき、ついには消去してみる。そして残りの要因だけが規定的な役割を演じていると考えてみる……」<sup>(18)</sup>、というようにして思考実験はなされる。思考実験は「それゆえ、理想化 Idealisierung または抽象 Abstrakt と呼ぶことができる」。これは、いわゆる「純粹モデル」、「範例的モデル」を設定する、ということである。マッハは近代科学を近代科学たらしめているこの方法を全面的に肯定する。「物理学上の普遍的な概念や法則というものは、いずれも理想化によって得られたものである。理想化によってこれらの概念や法則は、簡潔で、しかも普遍的な、限定条件の少ない形に——あまつさえ、これらの概念や法則の総合的な組合せによって、どんな複雑な事実であっても、任意の事実を再構成(換言すれば理解)できるような形に——仕上げられる」と。

マッハの模写論は経験批判論であり、内容的には、近代科学の認識方法、「純粹モデル」と悟性主義とに合致している。

### 3 『唯物論と経験批判論』から

レーニンのは『唯物論と経験批判論』で、マッハを批判しつつ、唯物論とは何かについて展開している。レーニンによれば、マッハは感覚

要素なるものをもつてきて、唯物論と観念論との対立をのりこえたというが、それはまやかしにすぎない。たしかに感覚要素は物体・身体・精神の三つの依属関係をつくっているもので、単なる感覚ではない。経験である。しかし、要素とは何か、と問われれば、それはしよせん感覚にすぎない。経験といっても感覚的経験でしかない。つまり、それは精神や意識、感覚でしかない。それらを第一次的なものとみなす立場である。それは観念論である。にもかかわらず、唯物論と観念論との対立をこえている、などというのはまやかしだとレーニンはいう。

唯物論は、物質・自然を第一次的なものとする。では、物質・自然とはいかなる存在か、そして何か。そして、それが第一次的とはどういうことか、ということが問題となる。エンゲルス、レーニンによれば、物質とは「われわれのそとに、われわれおよびわれわれの意識から独立」に存在しているものである。精神・意識とは、まず無関係に外的存在している客観的実在である。かのアリザリンの例でいえば、アリザリンがコールタールの中にあることを、きょう知った。そこで、きのうはコールタールのなかにアリザリンはなかったのか、と。覚知しなかったから存在しなかったといえるのか、と。いえない、とレーニン、エンゲルスはいう。このように、物質とは意識に先在しているものである、という。物質は歴史的にも論理的にも外在的客体であるという。

この物質が第一次的存在であるとはどういうことか。第二次的なも

がある、ということである。感覚、意識がそれである。「唯物論は自然科学と完全に一致して、物質を第一次的にあたえられているものとし、意識、思维、感覚を第二次的なものとみなす」。第二次的だということは、レーニンにとっては、まず「物質がわれわれの感覚器官に作用して感覚を生み出すのである」、ということである。つまり、感覚にとつて物質が作用因で、意識が受容側である、ということである。さらに、レーニン、エンゲルスによれば、感覚、意識を生み出す脳、神経、網膜などは、特定の仕方組織された物質である。この物質に依存しているのが感覚、意識である、という。この意味でも意識、感覚は第二次的なものである、という。「感覚、思想、意識は、特殊な仕方組織された物質の最高の産物である」。こうした考え方は、当然にもエンゲルス、レーニンの認識論を規定する。

では、物質とは何か。客観的存在であるということはどういうことなのか。ここでは、物質といったとき、それは自然のことである。レーニンは『唯物論と経験批判論』のなかで、物質概念を社会や歴史を含む概念としてはつかっていない、といえる。もっぱら、いわゆる自然科学の対象を物質といっていると考えていい。したがって、近代自然科学が、特にニュートン以来の物理学が明らかにしてきた自然の客観的な合法性、因果性、必然性を物質、自然の概念内容とする。マッハはこうしたことを否定する。自然のなかには原因も結果もない。それは主観的衝動であるという。物理的必然性なるものは存在しない。存

在するのは論理的必然性である、という。したがって、客観的合法性も否定する。我々が物質と呼ぶものは感覚要素の一定の合法的な連関にすぎない、とマッハはいう。また、ニュートンの絶対空間、絶対時間概念も否定する。こうしたマッハの議論は、レーニンにいわせれば当然の帰結である。というのも、マッハは客観的实在を認めていないからである。しかし、唯物論は自然・物質の客観的实在性から出発する。だから、「エンゲルスも自然の客観的な合法性、因果性、必然性の存在にかんしてすこしの疑念もゆるさなかった」<sup>(4)</sup>。こうもいう。「世界は物質の合法的運動である」<sup>(6)</sup>、と。やがて、このことが弁証法的運動をする弁証法的物質なる概念へと純化し、自然も歴史も社会をもつつみこむ概念とされていったのである。歴史の必然性、合法性、社会発展の必然性が客体的なものとして強調されるにいたった。それは、近代自然科学の法則概念の社会科学へのもちこみでもある。こうして、弁証法的物質の自己展開という客体の論理が出来上がった。しかし、これは「ヘーゲル主義」でしかない。ヘーゲル哲学の「精神」、「絶対者」に「弁証法的物質」がとって代っている。

#### 4 实在即認識

すでにのべたように、物質、自然が第一次的、先在的なものであり、精神、意識、感覚は第二次的なものである、というのがエンゲルス、レー

ニンの考えであった。「物質とは、人間にその感覚においてあたえられており、われわれの感覚から独立して存在しながら、われわれの感覚によって模写され、撮影され反映される客観的実在を言いあらわすための哲学的範疇である<sup>(1)</sup>」。ということは、認識とは、物質、外界の意識への反映、模写で「思惟する脳における自然過程の反映<sup>(2)</sup>」である。ことばをかえれば、認識とは物質が意識に働きかけることによって生ずるものだ、ということである。働きかけ、つまり触発ということはカントもいつている。しかし、カントは主観主導の先天的綜合判断なるものをつくった。反映論を否定した。結局、カントは主観を絶対化してしまったのであった。逆にエンゲルス、レーニンは客体、物質、外界を絶対化し、意識はただ働きかけをうけ取るうけ手とのみしてしまったのである。その意味では、認識論において主体が位置づけられていないことになる。その結果が、すでにのべた物質、自然の合法性、必然性、因果性など客体的実在の弁証法的運動が意識に反映したもの、あるいは模写されたものが、認識だということになった。こうして、認識と自然、物質、あるいはその客観的合法性とは、結局等しい、ということになる。エンゲルスはいう。「外部の世界および人間の思惟の運動の一般的諸法則——この二つの系列の諸法則は実質上は同一である<sup>(3)</sup>」。『反デュリング論』でもいう。「……われわれは思惟法則が自然法則に照応しているのを見いだすのである<sup>(4)</sup>」。レーニンにいわせれば「……人間がこの合法則性をあれこれの概念において近

似的に反映する……<sup>(5)</sup>」のである。つまり、客観的合法性、自然と認識とは、若干のずれがある。このずれをうめるために実践という考えをもつてくる<sup>(6)</sup>。「唯物論の認識論の基礎に実践の規程をもちこんでいる<sup>(7)</sup>」。この実践とは、認識した法則を意識的に使用することである。認識が正しければ実践は成功し、効果をあげる。「認識は、それが人間に依存しない客観的な真理を反映するばあいだけ生物学的に有用であり、人間の实践、生命の保存、種の保存に有用であることができる<sup>(8)</sup>」。もし反対に実践が失敗すれば、認識に誤りがあり、客観的合法性を正確に反映していないことになり、修正される。(どのようにして?) 認識の正しさを、実践の成功や効果で判断する。こうして、結局認識と客観的合法性とは一致することになる。すなわち、「世界は物質の合法的運動である。そして、自然の最高の産物であるわれわれの認識は、ただこの合法性を反映することができるだけである<sup>(8)</sup>」。かくして、實在即認識となる。しかも、物質は必然性、合法性をもって弁証法的に自己運動するものであり、その反映が認識であるのだから、認識とは物質の必然的、弁証法的発展性、法則性を把握するものとなるが、この見方は近代自然科学の立場に基本的に等しい。対象を客体とみなしているし、その客体が必然性、因果性をもって運動しているとみる。ただ弁証法的という修飾語がついているだけだ。したがって、エンゲルス、レーニンは近代自然科学を美化し、やがて、自然科学自体は善で、中立でその使用が問題なのだという考えになった。また、認

識は過程的なものとなった。認識が客体の運動、発展をなざるものとなったからである。これを過程的弁証法という。このため認識の論理構造の解明がなされなくなってしまった。

だが、認識が正しいか否かを実践の結果で決めることが出来るのだろうか。認識が正しくても失敗や敗北もあることは、多くの事実が語っているし、また認識が正しくなくても実践的には成功し、勝利することになったとはいえない。実践は認識についての絶対的尺度ではない。無関係でもない。認識と実践との関連性は当然あるが、同時に区別してそれぞれ独自に、その論理が追求されねばならないものではないのか。そうしなかったためにも認識の論理構造解明がなされ得なくなってしまうたし、あるいはゆきづまってしまうたのである。実践についてと同様である。実践とは客観的合法則（性）の意識的適用であるといわれているが、それでは人間は法則のロボットでしかない。また、単に対象を変革するものとのみみなされている。変革するものも変革されるはずである。その意味で、実践とはマルクスもいうように、労働、あるいは活動と同一概念である。しかも、現実的には認識に先だつものである。レーニンも、実践概念を矮小化してしまったのではなかろうか。こうなったのは、実践でもって外在的に認識の正邪をきめようとしたこと、それは認識を内在的にみることが出来なのからであり、認識の論理構造の解明をなしていないからであり、そうなるのも反映論で実在即認識だからであり、そして、その根拠は弁証法的

物質というヘーゲル主義的概念にある。過程的論構が問題なのである。そのためいづれの概念にも主体が位置づけられていない。正しくは現実論的、場所的に、立論されなければならない。

## 5 マッハの経験論とレーニンの唯物論

すでにのべたように、マッハの世界像は物体、身体、精神を複合する感覚要素の函数関係的な複合体である、ということであった。これは、カント的な物自体や伝統的な実体論を否定した考えである。世界は、我々に現前しているそのものである、ということである。その意味では現実論的であり、場所的である。また、物自体や実体を否定しているから形而上学を拒否している。因果性や必然性も否定する。こうした点では、近代哲学や近代自然科学の実体論的思考を越えようとするものである。それを経験論の立場にたって試みたといえる。したがって、世界や物体を感覚要素の複合体とした。しかし、この考え方は現象論でもあるし、また部分と全体、あるいは成素とその複合体という近代科学主義、近代思想、つまりここでは悟性主義のことであるが、それを堅持し、経験論の立場からそれを整合的に再構築しようとしたものである。その意味では、悟性主義の一層の徹底化の試みである。いわゆる現象主義である。

マッハにとっては、認識は環境世界への適応活動であった。精神に

現前する表象と表象との連合、あるいは諸経験を集約してつくられた概念と概念との連合判断であった。それは、事実を意識を適合させる、という意味であり、模写であった。しかし、この事実とは感覚的、経験的事実で、感覚要素の集合である。現象ともいえる。この点で、マッハの認識とは、現象を整理し、説明してみせるだけだ、といえる。現象論であり、悟性主義、現象主義である。客観主義でもある。したがって、物とは何か、物の本質、現実とは何か、現象の背後とかを解明しようとはしない。また出来ない。というのも、世界は、感覚の複合体であると考え、本質というような概念を否定しているからである。こうした存在論に認識が規定されているのである。

しかし、マッハはマッハの立場で認識の論理構造を説明している。適応活動、連合、概念、判断、思惟経験、というものを出していた。単純な機械的模写論や反映論ではない。どうして、それが可能となったのか。それは経験の立場に立っていたからであり、それ以上でも以下でもない。つまり、経験主体ではあるが、主体が認識論のなかにセットされていたからである。それは感受するだけだから、半主体ともいえるものだが、マッハの世界像、認識論に位置づけられていた。この点現実論的で、つまり、「現実」、「場所」から出発している。しかし、主体が経験主体にすぎないため、認識が、説明、了解のみとなっている。客観主義的になっている。したがって、主体を実践Ⅱ認識主体たらしめなければならない。また、存在論が感覚の複合体であってもい

けない。認識が悟性主義であってもいけない。

レーニンの客体、存在概念、そして反映論には主体が位置づけられていなかった。そのため、弁証法的自己運動する物質は外的実在であり、認識は即実在の過程的弁証法となった。かくして、認識の論理構造解明・構築はなされずにきた。このことを外的に補完するものとして、一方ではイデオロギーがさげばれ、他方では実践がいわれてきた。しかし、この意味での実践とは客観的合法則性の意識的実行といったもので、認識の尺度にすぎず、単純実践といったものにすぎない。実践の論理構造の解明などなされないできた。存在論では、伝統的な実体概念を、認識論では機械的唯物論の反映論をうけ入れてきたのである。それらには、主体概念がぬけ落ちている。特に、存在、客体はそれを弁証法的物質といったとき、ヘーゲル主義的概念となった。すべての問題はここからはじまる。だから、この概念を相対概念化しなければならぬ。つまり、現実論的・場所的に立論することである。そして、弁証法を實在や認識のロゴスとするのではなく、主客関係Ⅱ実践の論理とすることである。というのは、そのようにしないと、實在のロゴスがアプリオリなものとなってしまうからである。認識に先だって認識内容が明らかだ、ということになるからだ。また、弁証法を認識の論理とすれば、主観主義におちいるからである。

客体、といったとき、それは自然といった意味である。そこに主体概念を入れるということはどうか。場所的立論とは何か。梯

は、自然史の思想で、天体史、生物史、社会史と区分し、それぞれ内的矛盾をもって自己展開し、発展段階をたどってきたとした。社会史は人間の発生とともにじまる。自然と人間との関係性の段階である。しかし、梯においても、客体即主体となつてしまい、この矛盾関係の解明に失敗した、といえる。<sup>(1)</sup>過程的解明になつてしまったのである。というのも、レーニンの物質概念にたつていたからである。そうではなく、矛盾関係を「現実」、「場所」として措定し、論理的、共時的に解明しなければならぬ。さらに、関係項を伝統的実体としても、また、マッハのように感覚としてもいけない。関係において変化するものとするのである。自然と人間とを矛盾的参照関係にあるものとすべきである。それが物質代謝である。この全体を歴史的自然、「現実」、「場所」ともいう。それは、主体にとって、客体としての自然が相即的にある、というような梯の意味においてではなく、なまの自然など、我々にはないのだ、という意味においてである。我々に与えられている自然は、「産業と実験」によってつくられたものである。客体と主体との矛盾的参照関係、実践においてつくられたものの、否、その関係実践・活動そのものなのである。その意味で歴史的自然である。「現実」、「場所」である。それをこえた客体はない。あるように思うのは、認識が限界性を常にもっているからなのである。人間は、この歴史的自然、「現実」、「場所」において、自然対象に働きかけ、労働・活動・実践している。それによって、自然を変え、自己を変革している。自然は人間

を変革し、自己をも変えている。両「実体」とも変化する。人間主義・自然主義である。自然の人間化、人間の人間化である。同時に自然の自然化、人間の自然化でもあるはずである。というのは、物質代謝が存続していくためには自然と人間とが相互により自然、より人間でなければならぬからだ。自然の人間化といったとき、人間が自然を支配するという意味ではない、と思う。人間も自然存在であるから。「現実」、「場所」、歴史的自然の論理構造とはこのようなものではなからうか。こうした存在論にたつて認識論も展開されるべきだ。

認識論を認識論として構築するためには、反映論を捨てることである。客体即認識を否定することである。客体と認識とを区別することである。すなわち、認識に主体をもちこむことである。それによって、認識はまず認識として自立する。しかし、主体とは歴史的自然、「現実」、「場所」を構成する活動主体であるから、主体は実践を媒介に客体と認識とは関連する。活動主体は、労働、活動、実践する。自然主義、人間主義的目的意識的活動である。対象と自己とを共に変革する。教育者も教育される。この活動主体は認識主体でもある。このことに定位して、認識論は構築されるべきだ。そして学は、次のようにして、つくられていくだろう。主体は、「現実」、「場所」における活動において感性的直観をうる。梯はこれを実践的直観という。それをばねとして、その直観の根拠をさぐる。既成の学問、理論の批判的検討をも媒介してなされていく。これが反省、下向である。下向の極限で直観の根源

がみつか。これが学の原理・始元で、これから現実、実在が論理的に再構築されていく。これが上向である。こうした下向—上向論で学の形成がなされねばならない。そのためには、梯がいうように『資本論』を論理学として読むことによって、ヘーゲル『大論理学』を改作することであろう。

(学術研究費による共同研究の一環である)

(完)

## 注

(1) Ernst Mach (1838-1916)

1

(1) エルンスト・マッハ『認識の分析』(広松・加藤編訳、法大出版) 九頁

引用文は、文脈上多少改訳した。『認識』と省略、(2) 同八頁、(3) 同

五頁、(4) 同七頁、(5) 同二頁、(6) 同二頁、(七) 同二頁、(8) 同

(8) 同二頁

(9) エルンスト・マッハ『感覚の分析』(須藤・広松訳法大出版) 八頁

引用文は文脈上多少改訳した。『感覚』と省略、(10) 同六頁、(11) 同

七頁、(12) 同八頁、(13) 同二頁、(14) 同二頁、(15) 『認識』一

七頁、(16) 『感覚』一四頁、(17) 同二頁

2

(1) 『認識』五八頁、(2) 同六一頁、(3) 同六三頁、(4) 同九二頁、(5)

同六六頁、(6) 同六七頁、(7) 同二〇四頁、(8) 同二一三頁

3

(1) レーニン『唯物論と経験批判論』(大月版レーニン全集一四卷) 四三頁、

(2) 同五四頁、(3) 同五五頁、(4) 同二二頁、(5) 同二九頁

経験批判論の検討(伊藤一美)

4

(1) 同二五〇頁、(2) 同九六頁、(3) エンゲルス『フォイエルバッハ論』

(岩波文庫) 六二頁、(4) 『批判論』一八三頁、(5) 同二八四頁、(6)

同二六〇頁、(7) 同二六二頁、(8) 同二九九頁

5

(1) 拙論『梯経済哲学の検討』(幾徳工大研究報告A7号) 参照

(2) エンゲルス『フォイエルバッハ論』三二頁